# 高等学校における教科指導充実のために【家庭科編】

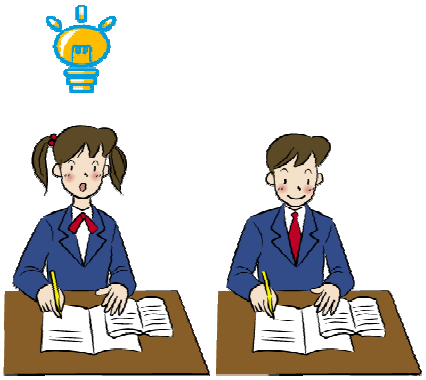
栃木県総合教育センター　平成29年3月

変化の激しいこれからの社会を生き抜く人を育てるために、いま「思考力」の育成がますます重視されています。本パンフレットでは、これからの「思考力」を育むことを目指した高等学校における教科指導の在り方について紹介しています。

## これから必要とされるのは「思考力」

平成19年の学校教育法改正によって、いわゆる学力の三要素が明確に示されました。それを受けて、現行の学習指導要領においても「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力その他の能力をはぐくむとともに，主体的に学習に取り組む態度を養い，個性を生かす教育の充実に努めなければならない」と定められています。このように習得と活用のバランスが重視されているところですが、高等学校においては授業及び学習評価が知識偏重型になりやすい傾向にあり、思考力等の育成に依然として課題が見られます。

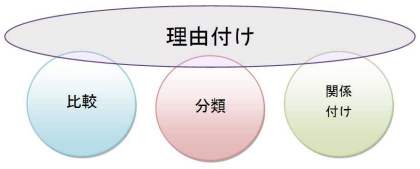
加えて、現代社会は急速な少子化・高齢化の進行による生産年齢人口の減少やグローバル化の影響等によって、日々激しく変化し、先を予測するのが困難になったり個人の力では解決できないような複雑化・多様化した問題に直面したりする場面が増えつつあります。そのような中で、いま教育の果たすべき役割にも変化が求められています。国では「育成すべき資質・能力を踏まえた教育の在り方」が検討されており、「何を学ぶか」だけでなく、「どのように学ぶか」「どのような力が身に付いたか」などの視点が重視されています。



これらのことを踏まえ、本調査研究では、これからさらに重要視されるであろう「思考力」の育成を、高等学校における教科指導の中でどう進めればよいのかをテーマに研究しました。

## 思考力を育むための「思考のすべ」

当センターでは、平成26・27年度に「思考力・判断力・表現力の育成に関する調査研究」を行いました。その中で、子どもたちが思考をするための技法として「比較」「分類」「関係付け」「理由付け」の四つを提案し、これらを「思考のすべ」と呼ぶことにしました。本調査研究においても、これを取り入れて思考力を育成する事例をいくつか紹介しています。「思考のすべ」についての詳細は、当センターのＷｅｂサイトを御覧ください。




栃木県総合教育センター「思考力・判断力・表現力の育成に関する調査研究（小・中・高）」
http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/shikouryoku_h26/index.html

# 事例１　適切な献立を作成できる力の育成を目指した授業の工夫

## ～給食との比較による食生活の振り返りと思考の深まり～

## 事例の概要

**○　本事例のねらい**

食生活分野における「食生活の自立と調理」の中で、青年期の食事摂取基準や食品群別摂取量の目安について学習する。しかし、栄養素や食品の概量を数値で示されても実感を伴った理解に結び付かないためか、学んだことが生徒の実際の食生活に生かされているとは言い難い。そこで、多くの生徒が小学校から中学校までの９か年にわたり親しんできた給食に着目し、給食で用いられている食品の内容と自身の昼食等で摂取している食品の現状とを比較することで、その違いを実感できるのではないかと考えた。これにより、これまでの経験や知識を結び付け、生涯を見通したこれからの食生活について深く考え、食生活の自立に向けて毎日の食事に活用できる力を身に付けさせるとともに、家族の食事まで管理運営できる力を身に付けさせることを目指す。そこで本事例では、思考を深めるために、比較、分類、関係付け、理由付けといった「思考のすべ」を取り入れた。

**○　小単元　食生活をつくる「食事の計画と調理①」**

**○　小単元の目標**

青年期の食事の重要性について理解し、自分の食生活を振り返り、改善点について考える。また、青年期の食事摂取基準や食品群別摂取量の目安を活用して、年齢、性別、生活条件や嗜好などを考慮した上で、自分や家族の献立を作成できるようにする。

## 授業の様子

**(1)　第１時「食事摂取基準と食品群別摂取量の目安」**

青年期（自分）の食事摂取基準と食品群別摂取量の目安を確認させた。また、四つの食品群について確認し、食品を分類することができるようにした。

**(2)　第２時「自分の食生活を振り返る」**

第１時を踏まえて、本時では自分の食生活が適正であるかを評価させる。特に中学生の時との大きな違いとして給食がなくなったことが挙げられるため、学校にいる時の昼食、飲み物及び間食も含めた食事と給食とを比較させた。

**【発問１】**　給食と普段の食事とを比較して、不足している食品や摂り過ぎている食品を書き出してみよう。

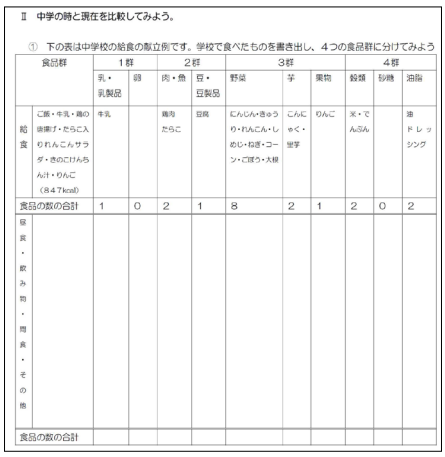
比較（示された視点による比較）

ワークシートに、給食の献立例にならって自分の食べたものを書き出させ、四つの食品群に分類してそれぞれの食品の数の合計を出させた。これにより比較の作業をしやすくする効果をねらった。

**【ワークシート①】**

生徒たちの記述内容を見ると、単純に「数が少ない食品＝摂取不足」、「数が多い食品＝過剰摂取」とはなっておらず、食品の使用量と食品群別摂取量の目安を関係付けて「不足、過剰」を判断していた。また“食塩”を摂り過ぎていると書いた生徒もいた。このように、多くの情報から必要な事柄を既習事項と関係付けて考え、的確に表現していた。

**【ワークシート②】**



Ⅱ　中学の時と現在を比較してみよう。

① 下の表は中学校の給食の献立例です。学校で食べたものを書き出し、４つの食品群に分けてみよう

| 食品群 | | 1群 乳・乳製品 | 1群 卵 | 2群 肉・魚 | 2群 豆・豆製品 | 3群 野菜 | 3群 芋 | 3群 果物 | 4群 穀類 | 4群 砂糖 | 4群 油脂 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 給食 | ご飯・牛乳・鶏の唐揚げ・たらに入りれんこんサラダ・きのこけんちん汁・りんご（847kcal） | 牛乳 | | 鶏肉 たらこ | 豆腐 | にんじん・きゅうり・れんこん・しめじ・ねぎ・コーン・ごぼう・大根 | こんにゃく・里芋 | りんご | 米・でんぷん | | 油 ドレッシング |
| 食品の数の合計 | | 1 | 0 | 2 | 1 | 8 | 2 | 1 | 2 | 0 | 2 |
| 昼食・飲み物・間食・その他 | | | | | | | | | | | |
| 食品の数の合計 | | | | | | | | | | | |

ワークシート①

② Ⅱの表を参考に、給食と普段の食事とを比較して、不足している食品や摂り過ぎている食品を書き出してみよう。

・不足している食品：

・摂り過ぎている食品：

ワークシート②

【発問２】 今のあなたの食生活は次のうちのどれに当てはまるか。
（大変よい・だいたいよい・あまりよくない・悪い） その理由を述べなさい。 理由付け1

【発問３】 この食生活を続けると次のうちのどれに当てはまるか。
（健康でいられそう・やや不安・不健康になりそう）その理由を述べなさい。 理由付け2

理由付け1 については、前段階の比較の結果をもとに判断していた。理由については食事の内容だけでなく、現在の体調や体重の変化についても考慮している生徒が多かった。

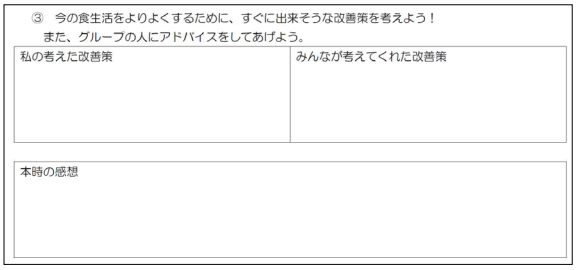
理由付け2 については、理由付け1 では“大変よい”“だいたいよい”と答えていても、ここでは“やや不安”“不健康になりそう”という答えが多かった。その主な理由は以下のとおり。

・現在は体重や体調の変化もなく健康だが、野菜が不足しがちである。
・今は栄養が足りているが、間食をしてしまうのでバランスの偏りが心配。
・乳製品が足りていないので骨粗鬆症になりそう。
・食事の時間がバラバラで定まっていない。　　など

これらの理由から、長期的な栄養の過不足や食習慣、生活習慣が身体に及ぼす影響について、これまでの学習と結び付けて考えることができているといえる。また、ペア活動にしたことで互いにアドバイスし合うことができ、更に思考が深まったといえる。

食生活をよりよい状態にするための改善策では、自分と相手、双方のことを考え記入させた。ここでは、すぐに実行できることに視点を置き、簡単にできることを考えるように強調した。それぞれのケースに合ったアドバイスがなされていた。

給食と比較することで、これまでの学習内容を実感を伴いながら理解した上で思考を深め、自身の食生活に結び付けて考えることができていた。 【ワークシート③】


③ 今の食生活をよりよくするために、すぐに出来そうな改善策を考えよう！
また、グループの人にアドバイスをしてあげよう。
私の考えた改善策
みんなが考えてくれた改善策
本時の感想

ワークシート③

(3) 第３時「家族の食事計画」

これまでの学習をさらに発展させて家族の１日分の食事の献立を作成させた。あらかじめ設定された家族の１日の食事を食品群を満たすように考えさせた。その際、家族それぞれのライフステージを考慮し、調理の際の注意点を備考欄に記入させた。

## 成果

比較（示された視点による比較） について

自分の食事で摂っている食品を四つの食品群に分類し、食品数に着目して給食と比較させた。生徒たちは食品数のみでなく、食品の量や質についても考え答えていた。また、検討の結果から、日頃の食生活全体のことも含めた改善策が多く見られた。生徒たちは現在の自分の食生活の課題を自覚し、改善策を考えることができた。

理由付け について

食生活を評価する際に「なぜなら」の部分を考えさせることで、これまで小単元ごとで完結していた情報を整理し、活用することができた。

「思考のすべ」を用いることは生徒の学習の活性化につながるとともに、個々の思考を深めることにつながると感じた。

## 思考力を身に付けさせるための工夫

献立は、食生活に関する分野の基礎的・基本的な知識や技術を活用して作成する。本事例では、給食というこれまでの経験と食事摂取基準や食品群別摂取量の目安という新たに習得した知識を「思考のすべ」を用いて結び付けさせた。食事摂取基準や食品群別摂取量の目安を生徒たちが具体的に捉え実感を伴って理解をすれば、自らの食生活に生かすことができ、さらには家族の食事まで管理運営できる力を身に付けさせることにつながる。本事例のように、本時の目標に迫るための意図的な発問を設定し「思考のすべ」を用いることは、生徒の思考を深める上で重要である。

# 事例２　食生活を管理する意識を高める授業の工夫

～環境に配慮し災害時でも家族の健康を守る食生活を考える～

## 事例の概要

**○　本事例のねらい**

もし近隣で災害が発生した場合には、食生活分野で学んだ知識と技術を生かして生徒たちに家族や地域を支える主体となってもらいたい。そのために、備蓄食品を利用しての献立作成及び調理実習を実施した。並行して、市町や県の防災に関する資料等から災害時の対応やそのための備えについて学んだ。これらを通して、いかなる時でも食生活を自ら管理する意識を高め、そして、一人一人が家族や地域を支える主体となることに気付かせたい。さらに、日頃から災害に備える態度を養うことを目指す。

そこで本事例では、ライフラインの停止状態や避難生活を想定し、食生活がどのように変化するのか、どのような対策が必要であるのかについてグループで協議し、解決策を見いだす過程で、個々の思考を深めさせることとした。

**○　小単元　食生活をつくる「食事の計画と調理②」**

**○　小単元の目標**

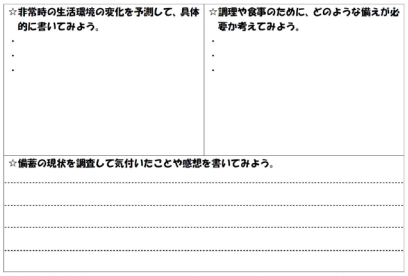
災害時の食生活について関心をもち、これまでに学んだ知識と技術を活用した調理の計画を作成する。また、指定された条件のもとで調理実習を行い、実践力を身に付ける。

## 授業の様子

**(1)　第１時「備蓄食品調査の整理」**

食品の備蓄の現状を知るために、夏休みに各家庭の備蓄食品調査を行った。本時は各家庭の調査結果を持ち寄り、班ごとに集計して傾向や備蓄数について考察した。備蓄の必要性に気付かせ、意識を高めたいと考えた。

**【ワークシート】**




ワークシート

**(2)　第２時「３日間の献立作成」**

本時においては、災害発生時に家庭にあるものを利用して命をつなぐことができるよう、備蓄食品を生かした３日分の献立を作成することを目標とした。４人家族を想定し、冷蔵庫に残る生鮮品と前時のワークシートでまとめた備蓄食品を用いることとした。**【作成の条件】**、**【献立作成の際に使用できる食材】**を提示した上で、以前に学んだ食品群別摂取量の目安を用いて、限られた条件の下で、できるだけバランスの良い食事になるよう工夫を求めた。また、生徒の思考を深めるために、グループでの話合いの際には意見の根拠を明確にするよう指示した。

**ア　献立作成の方針の検討、決定**

家庭にあるものをどのような順番で、どのような組み合わせで使うべきかを話し合い、献立作成の方針を立て、その理由を明確にさせた。**【献立作成の方針例】**(P. 5)

・　「家庭にあるもの」を、早期に消費すべき生鮮食品、常温でもある程度鮮度を保つことのできる食品、長期保存可能な食品に分類し、無駄のない食べ方を考えている様子が多く見られた。

・　献立の組み合わせを考える際には、食品群別の摂取量を確認したり、調理を簡単に済ませる方法について協議したりして、様々な角度から検討し意見を集約していた。

| 〈状況〉 | 〈家族構成〉 |
|---|---|
| ・災害が発生した。<br>・ライフライン（電気・水道・ガス）が停止した。<br>・家庭にあるもので４人家族３日分の献立を作成する。 | ・父（40代）<br>・母（40代）<br>・本人・男（高２）<br>・妹（中３） |

作成の条件

| 家庭にあるもの | | | |
|---|---|---|---|
| 〈冷蔵庫に入っていたもの〉 | | 〈冷凍庫に入っていたもの〉 | 〈備蓄食品〉 |
| ・牛乳１Ｌ<br>・ヨーグルト500ｇ<br>・納豆３パック<br>・りんご２個<br>・にんじん２本<br>・トマト２個<br>・ジャム１瓶 | ・卵２パック<br>・チーズ12ｇ×８個<br>・魚肉ソーセージ３本<br>・たまねぎ３個<br>・じゃがいも５個<br>・キャベツ１／２個 | ・鶏もも肉（唐揚げ用）300g<br>・豚ひき肉300g<br>・塩鮭切り身２切<br>・弁当用コロッケ６個 | ワークシートで集計した備蓄食品を用いる。 |

献立作成の際に使用できる食材

| 班 | 献立作成の方針 | 理由 |
|---|---|---|
| 1 | 節約しながら栄養バランスの良い食事をする。 | 節約しながら計画的に消費しないとすぐになくなってしまうから。非常時は栄養が偏ってしまうから。 |
| 2 | 傷みやすいものは早めに消費し、無駄なく使い切る。 | 生鮮食品は傷みやすい。限られた食品を無駄なく食べるため。 |
| 3 | 無駄な水をなるべく使わない料理を作る。 | 断水のため備蓄の水は貴重だから。 |
| 4 | 即席ラーメンを活用する。 | 即席ラーメンは備蓄量が多く、みんなの好きなものだから計画的に使う。 |

献立作成の方針例

活動の様子

**イ　３日目の夕食献立の発表**

３日目の夕食献立をラミネートシートに記入し、黒板に掲示して発表させた。

| 班 | ３日目の夕食献立 | 献立作成の理由 |
|---|---|---|
| 3 | ・クリームスパゲティ<br>（スパゲティ、マカロニ、ツナ、シチュー、玉ねぎ）<br>・切り干し大根サラダ<br>（切り干し大根、酢、砂糖、しょうゆ） | 日持ちするものを３日目まで残しておいて使った。クリームスパゲティは麺だけでは少ないので、マカロニも入れた。野菜の量が少ないので切り干し大根を使うことにした。 |
| 4 | ・スパゲティハヤシライス<br>（スパゲティ、レトルトハヤシルウ）<br>・ふかしいも（じゃがいも）<br>・りんご　・即席汁物 | お湯を無駄なく使うことのできる料理を考えた。お湯を沸かしたらまず即席汁物を作り、残ったお湯でスパゲティとじゃがいもを茹でる。最後にレトルトのルウを温める。 |
| 5 | ・力うどん<br>（うどん、もち、卵）<br>・コールスローサラダ<br>（キャベツ、にんじん、玉ねぎ） | ボリュームを増やすためにうどんに餅を入れ、卵を加えて栄養価を高めた。うどんがシンプルなので、冷蔵庫にあった野菜でサラダも作ることにした。 |
| 8 | ・野菜たっぷり塩ラーメン<br>（塩ラーメン、乾燥わかめ、卵、玉ねぎ、キャベツ、にんじん）<br>・りんご | 栄養満点になるように、ラーメンは具だくさんにした。家族の好きなラーメンを食べて元気を出したいと思った。 |

生徒が考案した献立例

### (3)　第３時「調理計画の作成」

前時に各班が考えた献立の中から「クリームスパゲティ」と「野菜たっぷり塩ラーメン」を実習で取り上げることにした。他に、「アルファ化米」、「切り干し大根サラダ」、「ポテトサラダ」の３品を追加し、調理計画を立てさせた。

**【調理形態】**
- ペア調理２組で一班
- １ペア２～３品の調理

**【調理の条件】**
①調理時間　30分
②熱源　　一つ
③鍋　　一つ

（2）調理計画を立てよう　【調理時間の目安：３０分　条件：熱源一つ　鍋：一つ】

| 献立＼時間 | 0 | 5 | 10 | 15 | 20 | 25 | 30 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 担当者（　） | ボリ袋に七切り干し大根、乾燥わかめ、水100mlを入れてもむ。 | にんじん、玉ねぎを切る。コーン缶の水を切る。 | 沸かしたお湯にスパゲティ、マカロニ、にんじん、玉ねぎを入れ茹でる。 | 茹であがったらシチューのルウを加え弱火で溶かす。 | | | |
| 担当者（　） | ツナ缶の油を切る。酢、砂糖、しょうゆを混ぜる。 | スパゲティを半分に折る。⇒材料を全て鍋に入れてもむ。 | 鍋に分量の水を入れ火にかける。 | 茹であがる1分前にツナとコーンを加える。 | | | |

調理計画の例

### (4)　第４時・第５時「災害時の調理」

実習及び事後の振り返りを行った。

**ア　実習**

盛り付けは紙皿を使用することとし、一人あたり平皿・深皿各１枚ずつ使ってよいことにした。２枚の皿に５品を盛り付けることになるのだが、汁物が２品ある。盛り付けには工夫が必要である。

**イ　振り返り**

試食後に相互評価を行った。良い点、改善点、気付いたこと、その他を付箋の色を分けて記入し相手に渡した。

うまくいかなかった点について、改善点を添えて指摘することでお互いの思考の深まりがみられた。

２枚にクリームスパゲティ、２枚にラーメンを盛り、シェアした。

全ての班が、切り干し大根、アルファ化米、ポテトサラダの３品は盛り合わせた。

４枚にラーメンを盛り食べ終わったら洗わずにスパゲティを盛る。

盛り付け方の工夫例

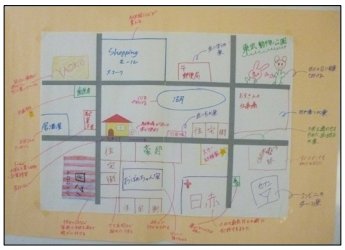
## 成果及び思考力を身に付けさせるための工夫

**事例１**で紹介した「食事の計画と調理①」において学習した献立に関する基礎的・基本的な知識と技術を活用して、災害発生という非常時においても家族の健康を維持するための食生活を構築していく意欲と態度を育むことができた。避難生活における具体的な場面設定や、生徒の思考の流れを遮らない段階をおった授業の展開が、グループでの協議を必要感をもって活性化させ、解決策を見いだすことにつながった。生徒に思考力を身に付けさせるためには、生徒一人一人が必要感をもって検討できる題材の設定が必要となる。

# 事例３　子育てしやすい環境を考えることを目指した授業の工夫

## ～親の視点に立ち子どもを育てることについて考える～

## 事例の概要



**○　本事例のねらい**

生徒の回答した授業前アンケートの結果を見ると、「赤ちゃんを抱いたことがない」は２割以上、「幼い子どもとかかわる機会がない」は約６割であった。実生活の中で子どもとの触れ合いが少なく、子育てについて考える機会はほとんどない現状の中、「子どもを育てる」ということを親の視点に立って考えるということは生徒にとって難しい。また、「子育てのイメージ」については、８割近くの生徒が「大変そう」「辛そう」「忙しい」といったマイナスイメージをもっていることも分かった。しかし、どのようなことが大変なのかを具体的に記述している生徒はほとんどいなかった。

そこで本事例では、子どもを育てていく立場としての親（保育者）の視点に立ち、子どもを育てることについて具体的に考え、子育てのイメージを広げ、子育て環境としてのよりよい姿を考えることとした。そのために、子育て中の方のインタビューを用いてイメージを広げ、夫婦間の協力や子どもをもつ家族の環境について、グループで協議し考えをまとめていく過程の中で生徒の思考を深めさせることとした。

**○　単元　子どもを育てる**

**○　単元の目標**

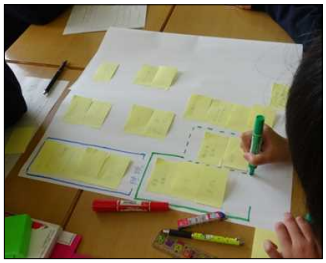
子どもの成長・発達の特徴や子どもの生活を知り、生活習慣の形成の重要性を理解し、親の役割とは何かを考える。また、子どもを育てるということを主体的に捉え、親の視点に立ち子育ての楽しさ大変さについて具体的に考え、学習を通して子どもを育てるためのよりよい環境を考察する。

## 授業の様子

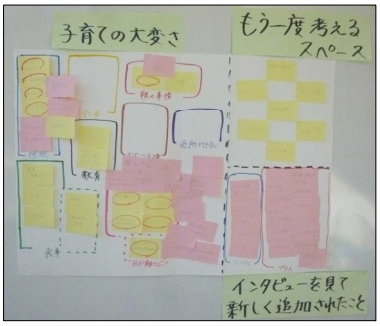
**(1)　第９時・第10時「子育てについて考えてみよう」**

**ア　「子育て」について模造紙にまとめる**

**【活動の流れ】**
①生徒のイメージする子育ての大変さを、黄色の付箋でまとめさせる。
②動画視聴後の子育てイメージや感想を桃色の付箋に記入する。
③桃色の付箋を黄色の付箋と同じ内容、新たに追加された内容とに分ける。**【資料１】**



活動の様子




資料１

**イ　子育てインタビューの動画を視聴する**

動画が始まると生徒たちは静かになり、集中している様子がうかがえた。視聴後に時間をとったところ、メモだけでなく、感じたことや印象に残ったことなどを自分なりの言葉でまとめている生徒も見られた。実際の母親の表情や言葉を見聞きしたことで、自分の中にもっていた考えやイメージを具体化することができ、思考を深めている様子が見られた。

**(2)　第11時「子育ての大変さを減らす方法を考えてみよう」**

**ア　子育て中の１日の生活から、具体的に何が大変かを知る**

インタビューに協力してくれた人たちに、ある１日の生活の流れを聞き、時間軸の表を作成した。表の中で大変そうだなと感じる部分にマークをさせると、日中から夜にかけての家事育児に関するすべてにマークをする生徒や、夜中の授乳を中心にマークする生徒などそれぞれにマークの仕方に違いが見られた。たくさんマークをしていた生徒は、「子どもの世話をしながら、限られた時間で家事をこなさなくてはいけないことが大変だと感じた」と発表していた。

**イ　子育ての大変さを減らす方法を父親の目線で考える**

家庭内での子育てを父親の視点で考えさせた。母親がストレスと感じている三つ「①自分の自由な時間がとれない、②寝られない、③家に子どもと二人きりで息が詰まる」について改善策を考えさせた。

**ウ　父親のインタビュー動画を視聴する**

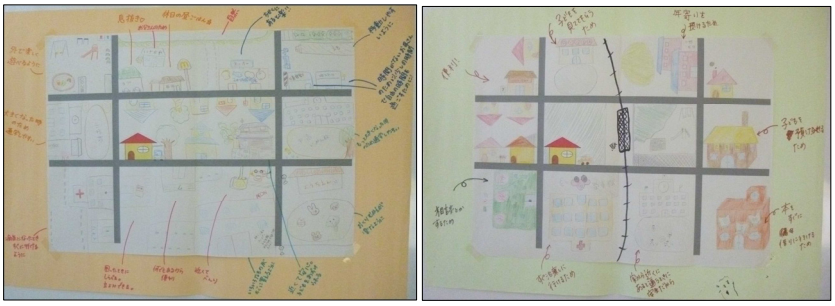
父親（29歳１児〈５か月〉）に「子どもができて変わったことは何ですか？」という質問に答えてもらった動画を視聴させた。当事者の語る映像は、生徒たちにとって貴重なものであり印象に残ったようである。

### (3)　第12時・第13時「子育てしやすい理想的な環境を考えてみよう」

**ア　子育てしやすい環境を考える**

これまでの学習の中で、母親の立場で子育ての大変さを知り、家庭内だけでは子育ての大変さが解消しきれないことも知った。それらを踏まえ、子育てしやすい環境を考えさせることにした。家を一軒だけ描いた簡単な地図をグループに渡し、その家に父、母、未就学の子どもが暮らしているという設定をした。そこに子育てする上で近くにあったらいいと思える家や施設などの環境を絵で表現させた。また近くにあるとなぜ子育てしやすいと感じるのか理由も記入させた。どのグループも真剣にかつ楽しそうに活動しており、子育てをしやすくするために母親の視点からも、父親の視点からも考えることができていた。【資料２】

子育ての大変さを考えたことで、母親の悩みを解消するための場所がどのグループにも描かれていた。また、子育てをしていく上で、周囲の人の支えが欠かせないことを理解しており、さらに日常生活を送る上で欠かせない衣食の安全管理についても、幼い子どものいる生活の中では簡単ではないことが分かったようであった。前時に父親の役割を考えたことも生かされており、父親の職場や趣味の場を記入しているグループもあった。さらに、子どもの今後の成長や病気等の緊急時についても考えており、子どもを思う親の視点に立って考えられていた。



資料２

・ママ友の家や祖父母の家……子育てする上で周囲の人の支えが欠かせない
・公園や森や田んぼなどの自然……子どもの遊び場の確保は重要
・スーパーマーケットや薬局、服屋などの店……便利
・病院……子どもに何かあってもすぐに行けて安心
・学校……子どもが成長していく未来を考えて
・保育所……送り迎えが楽である
・父親の職場……すぐに帰ってこられる
・支援センター……子育ての悩みを相談できる

地図に描かれたものの例

**イ　市の子育て支援を知る**

市における子育て支援の取組を知るために市役所の子ども課に話をうかがい、様々な取組の中から四つの取組を紹介していただいた。それをプリントにまとめ生徒に配付し紹介した。

**ウ　これから自分たちにできることは何かを考える**

これまで学習してきたことを踏まえて、これから自分たちにできる支援は何か、それはどのようなことかを考えた。

## 成果と課題

**○　成果**

母親や父親への子育てインタビューの動画視聴とグループでの話合いを通して、子育てのイメージを具体的にもたせることができた。また、子育て中のストレスや大変さを解消するための方法を検討したり、学んできたことを踏まえ、子育てしやすい理想的な環境について検討したりすることによって、親としての視点に立ち子どもを育てることについて深く考えることができた。

**○　課題**

この分野は、明確な正解のある分野ではない。授業をまとめていく際のポイントの整理に難しさを感じた。生徒の考え方（価値観）は多様であり、教員がその多様性を認める言葉がけを意図的にできているのか、教員の考え方（価値観）を押し付けていないか等、家庭科教員として思考の柔軟性をもつことの大切さについて改めて考えさせられた。

## 思考力を身に付けさせるための工夫

乳幼児期の子どものイメージが希薄な生徒たちには、教員が作成したインタビュー動画や市の取組を紹介したプリントが、子育てを具体的に捉えイメージを広げることに効果的だった。また、生徒たちの思考を深めるために考えた付箋と模造紙の使用法の工夫も有効だった。このように、生徒の思考を深め単元の目標を達成するためには、適切な教材の提示が必要である。

# これからの「思考力」の方向性

## 育成すべき資質・能力

◇「キー・コンピテンシー」　「２１世紀型スキル」

いま、様々な国や機関で「育成すべき資質・能力」を踏まえた教育の在り方についての研究が進められています。「育成すべき資質・能力」としては、例えば、ＯＥＣＤの「キー・コンピテンシー」やＡＴＣ21sの「21世紀型スキル」などが広く知られています。

◇「21世紀型能力」

日本の国立教育政策研究所も日本型モデルとして「21世紀型能力」を提唱しています。これは、「思考力」を中核として、それを支える「基礎力」と思考の方向性を決定する「実践力」を重層的に育むというものです。（**図１**）

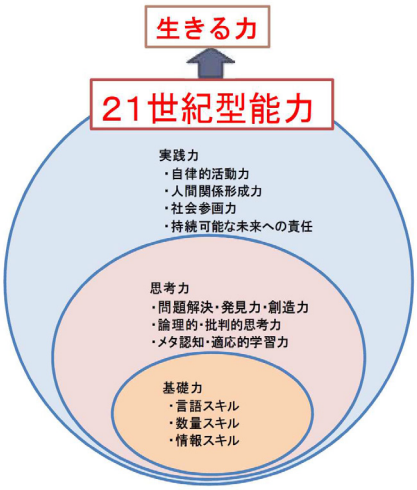



**図１　21世紀型能力**
（国立教育政策研究所のWebページより）

## 次期学習指導要領の方向性と思考力

平成28年12月に中央教育審議会から「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）が出されました。その中では、育成を目指す資質・能力の三つの柱（**図２**）を踏まえて、「何を教えるか」という学習内容の見直しだけでなく、「どのように学ぶか」という学びの質を高めることを重視しています。

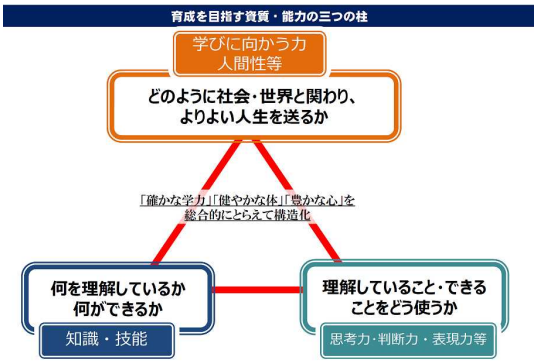



**図２　育成を目指す資質・能力の三つの柱**
（文部科学省Webページより）

具体的には、「アクティブ・ラーニング」の視点とも言われる、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の実現を求めています。特に「深い学び」とは、「習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう」学びです。本調査研究のテーマである「これからの思考力」を育む取組は、この「深い学び」の実現に通じるものと捉えることができます。


栃木県総合教育センター（研究調査部）

〒320－0002
栃木県宇都宮市瓦谷町1070

電話：（０２８）　６６５－７２０４
FAX：（０２８）　６６５－７３０３


本事例についての詳細は、本調査研究のWebサイトを御覧ください。

栃木県総合教育センター｜
調査研究・報告｜教育課題に関する調査研究｜平成28年度調査研究　高等学校における教科指導の充実
http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/kyokasido_h28/index.htm